

はじめに

塾講師として約30年働くなかで、私は多くの保護者と関わってきました。若いころは、親の気持ちに寄り添えず、怒らせてしまったこともあります。なぜわかってくれないのだろう？と理解できませんでした。

それぞれの子育てを見つめながら、私なりに考えを持ち、その経験をすべて子育てに活かそうとしました。そうすれば、理想の教育が実現できると思っていたからです。ところが、いざ自分自身が親になってみると、思うようにいかない現実を突きつけられます。なんて駄目な母親だろう……仕事ではいつも勝ち気だった私が、初めて「親の気持ち」に気づくことができました。赤ちゃんの息子が、私の尖った部分を削ぎ落としてくれます。そして今、悩んでいた日々を振り返ると、そのすべてが息子を愛した時間であることに気づきます。

小学6年生が終わるころ、息子の知能指数（IQ）が150近くあることを知りました。IQが130以上の子どもたちは、「ギフトイッド」と呼ばれます。息子は、幼いころから複雑なルールの遊びを好み、一度集中すると止まりませんでした。

小学校に上がると、学校という小さな檻の中に無理やり閉じ込められているように見えま

した。窮屈な思いから、1〜2年生のときは毎日腹痛に苦しんでいました。私はいつも子育てに自信が持てず、自分を責めつづけました。IQ検査の結果を見て、息子に合わない子育てをしていたことに気づき、がくぜんとします。

アサガオの種からヒマワリの花を期待する人はいません。ですが、子育てでは、親の理想の花を子について期待してしまうものです。IQ検査はいい意味で私に開き直りを与えてくれました。

我が子だけを見て、我が子を丸ごと愛せばいい。

人と違うなら、人と無理に合わせるのはやめよう。

皆と同じように育たない息子は、きっと皆と違う花を咲かせるために生まれてきたのです。花が咲くのを待つとき、人はその成長を純粹に喜ぶでしょう。いつ花が開くだろう、どんな色だろうと、期待しながら楽しみに待ちます。毎日、水をやり、手入れをし、花が咲くのをじっと待つ時間は、豊かさを与えてくれます。なのに、人はなぜ、人に対しては同じように待てないのでしょうか。ワクワクする気持ちよりも、なぜ不安が先にたってしまうのでしょうか。

ギフティッド、発達障害……世の中には、人を枠にはめようとする言葉があふれています。

ですが、分類すれば、生き方の答えを示してくれるわけではありません。ギフトテッドにどう関わればいいのかだろう。本を読んでも、インターネットで検索しても、その答えが見つかりませんでした。ギフトテッドの子育ての悩みを通し、私はひとつの考えにたどり着きます。子どもたちは、「自分色」の花を咲かせるのです。「自分らしさ」で輝く世界で生きるともいえません。子育てに取扱説明書はありません。もし共通した答えがあるのならば、親も子どもも「自分らしさ」を見つめる生き方が必要だということでしょう。成績がいい、運動ができる、特技がある。それはその子の「自分らしさ」とはいえませんが、周りと比べた結果に過ぎないからです。

私は「点数の世界」で生きています。点数を上げ、志望校に合格させることが私の使命です。ですが、点数の世界で生きているからこそ、点数がすべてではないとわかっているのかもしれません。

息子は、常に生きにくさを抱えながらも、前を向いて歩んでいます。

本書では、息子が「自分色」を見つけるまでの過程を描き、なぜ息子が自分を受け入れることができるようになったのかを綴っています。

読後には、子育ての鍵となる「自分色」をどう見つけていけばよいかかわかるでしょう。

本書を手にする子育てに悩む方々の傍らで、いつか唯一無二の素敵な花が咲くよう、お役に立てれば嬉しく思います。